

■ 特集展示「京狩野家第九代 狩野永岳—多様な画風と画技—」 作品リスト ■

番号	名称	数量	品質形状	制作年代	所蔵
1	『平安人物志』嘉永5年版	1冊	紙本木版	江戸時代 嘉永5年(1852)	当館
2	井伊直弼画像	1幅	絹本著色	江戸時代後期	当館 (井伊家伝来資料)
3	旭日に巖波涛図	1幅	絹本著色	江戸時代後期	当館
4	桂宮本邸障壁画等粉本	1枚	紙本墨画	江戸時代後期	個人
5	楼閣山水図	2幅	絹本著色	江戸時代後期	当館
6	寿老人図	1幅	絹本著色	江戸時代後期	当館
7	山水人物図	6曲1隻	紙本墨画	江戸時代後期	当館
8	天橋立図	6曲1隻	紙本著色	江戸時代後期	個人
9	桜図	6曲1隻	紙本金地 著色	江戸時代後期	個人
10	鍾馗図	1幅	紙本墨画	江戸時代後期	当館
11	出山釈迦図	1幅	紙本墨画	江戸時代 安政4年(1857)	当館 (青木巖氏寄贈)
12	七福神図	1枚	紙本墨画	江戸時代 天保9年(1839)	当館 (個人寄贈)

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

2 ^{い い なおすけ が ぞう}井伊直弼画像 狩野永岳筆 1幅

絹本着色

縦105.5cm 横41.2cm

江戸時代後期

当館蔵（井伊家伝来資料）

彦根藩井伊家13代直弼^{なおすけ}(1815-60)の肖像画。狩野永岳は、直弼の藩主時代に彦根藩の御用をつとめ始めたと考えられます。当時彦根藩では既に、先代直亮^{なおあき}が抱え始めた佐竹永海^{さ たけ えいかい}が御用をつとめており、直亮は永海に肖像画を描かせています。

後世の記録ではありますが、安政7年(1860)正月、井伊直弼は狩野永岳に自らの肖像画を描かせ、井伊家歴代の菩提寺である世田谷の豪徳寺と彦根の清凉寺、そして天寧寺の3カ寺に納めさせたといいます。この2ヶ月後の3月3日、直弼は桜田事変で世を去りました。

本作の直弼像は、清凉寺本と寸法、筆致ともにほぼ一致するもので(*1)、井伊家にいくつか提出した直弼像のひとつと考えられます(*2)。落款こそないものの、その筆致から永岳筆と判断してよいものです。

*1 清凉寺本には御簾が描かれ、直弼の和歌がしたためられている

*2 ほかに、この時の下絵と見られる直弼画像も井伊家伝来資料中に現存する



(部分)

7 さんすいじんぶつ ず 山水人物図 狩野永岳筆 6曲1隻

令和7年購入

紙本墨画

縦161.4cm 横362.6cm

江戸時代後期

当館蔵

琴と書を嗜む高士が描かれていることから、本来、山水を背景とした一双の琴棋書画図であった可能性が高いものです。琴を奏で、それに聴き入る人物は、それぞれ、中国・春秋時代の楚の琴の名人、伯牙と、その音楽の理解者、鍾子期。また、鷺鳥を傍らに扇に書を書く人物（*1）は、中国・東晋の書家で、書聖と称される王羲之と判断されます。王羲之背後の衝立の書は、武帝の「秋風辞」。

本作は、水墨を基調とし、金泥と銀泥で霞を表しています。土坡や岩の緻密で重層的な皴法を用い、細かく震わせた長い平行線を幾重にも重ねて波を表す点に永岳画の特色がよく出ており、奥行きを十分に感じさせる壮大な山水図も永岳の得意とするところです。確かな筆致で以て、器物に至るまで簡略化せずに緻密を極めて描き込み、人物も謹直に描くことから、制作時期は、三～四十代頃の、氣力の漲った中年期と考えてよいでしょう。

*1 王羲之が売れない扇売りの老婆のために扇に字を書き、人々が競ってこれを買求めたという故事があり、「王羲之書扇図」という有名な画題ともなった。



（部分）王羲之



（部分）伯牙と鍾子期

8 あまのはしだて 天橋立図 狩野永岳筆 6曲1隻
紙本著色
縦153.0cm 横355.2cm
個人蔵

松島と天橋立の組み合わせの6曲1双屏風のうちの右隻。名所絵であると同時に松が主題の作品とも言えます。壮大な光景を感じさせる構図をとる中、本作の最大の特徴は松の描き方にあります。近景、遠景にかかわらず同じ形状で、緑青と群青の楕円を重ねることで松葉を表現し、長く続く入江線、細かく震わせた長い平行線を用いた波の表現とあいまって、デザイン性が際立つ画となっています。



(部分)

10 鍾馗^{しょうきず}図 狩野永岳筆 1幅

紙本墨画

縦128.1cm 横55.4cm

江戸時代後期

当館蔵

鍾馗は、疫病神を追い払い、魔を除くと信仰された神。年末年始に像を掛けて邪気を払う習慣だったのが、後、五月五日の端午の節句に幟^{のぼり}に描いたり、五月人形として作られたりしました。

永岳は水墨で颯爽とした鍾馗の姿をあらわしています。京狩野家二代山雪^{さんせつ}の遺稿をもとに三代永納が編集した『本朝画史』などによれば、初代山楽^{さんらく}は鍾馗を描くことしばしば、その画は霊験があったといいます。本作の鍾馗は、顔貌表現や強弱をつけた筆線など、伝統的な狩野派の水墨画の画風で描かれています。

